

島 木 健 作

現代日本文学館

28

小林秀雄 編集

文藝春秋

現代日本文学館 28

林房雄・島木健作

昭和四十四年二月一日第一刷

著者 林房雄
島木健作

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話東京(二六五)一二一一

振替東京七八七四三

印刷 凸版印刷

製本 凸版製本

定価 四八〇円

Printed in Japan

本全集の本文は現代表記にいたしました

目次

林 房雄伝 河盛好蔵 3

青年 21

解説 256

島木健作伝 橋川文三 263

生活の探求 283

黒猫 437

挿 画	年 譜	注 解	解 説	ジ ガ 蜂	む か で	赤 蛙
473	463	457	453	450	444	
畦地梅太郎「生活の探求」	伊坂芳太良「青年」					

林
房
雄
伝

河
盛
好
蔵

林房雄は本名を後藤^{ごとう}寿夫^{しうふ}といい、明治三十六年（一九〇三）五月三十日に大分市大分港に生まれた。祖父後藤^{ごとう}載武^{さいぶ}は岡（竹田）藩士で、母ヒデはその家付きの娘である。父滝太郎は大分郡^{おほぶんぐん}狭間村^{せまむら}の小地主長田家からヒデのもとに入婿した。寿夫はその長男で、一人息子である。父は大分港の雑貨商で旅館を兼業していたが、母ヒデは寿夫を士族の息子に育てる意志を持ち、祖先伝来という鎧や刀を見せ、家系を語り、袴をはかせたりした。彼女の寿夫に与えた影響は非常に大きく、それについては追々述べることにする。

寿夫は幼少のころからすこぶる俊敏であったが、暴れん坊の餓鬼大将で、小学時代は常に優等生で級長を勤めながら、品行だけはいつも乙であった。少年雑誌や世界童話集、冒險小説、立川文庫などを乱読した。三年生の時、明治天皇の崩御にあい、下級生代表として夜の遙拝式に参列した。十歳のころから父滝太郎の放蕩と酒乱はなほだしく、家運傾き、十二歳のとき、ついに破産の宣告を受け、大分港より市外北太平洋寺村に移り、親子三人、農家の土蔵を借りて暮らす貧窮ぶりであった。寿夫は父のつくる草鞋^{わらじ}を売り歩いてわずかな収入をえ、母は近くの製糸工場に女工として働いた。赤貧洗うがごとき生活で、小学校では餓鬼大将の地位を失い、村では他所者の女工の子として、あらゆる

屈辱をしのんだ。《ここで経験した貧乏のおかげで、どんな貧民窟の生活を見せられてもおどろかなくなる。後年の社会主義思想もここで用意された》と彼は自筆の年譜のなかに書いている。しかし依然として文学少年であって、自作の作文、新体詩、短歌をのせた謄写版刷りの個人雑誌「双葉」を作ってクラスに配ったり、「日本少年」「少年世界」などに投書して、選外佳作になったりした。

家庭の貧困のために中学校へゆくことはあきらめていたが、彼の英才を惜しんだ受持教師が両親を説得してくれたために、大分県立大分中学校の受験だけは許された。それが二番で合格したために、母の決意が固まり、村でただ一人の中学生になった。大正五年（一九一六）十三歳のときである。

中学時代には図画教師山下鉄之輔から絵画、音楽、文学（特に白樺派）について熱心な啓蒙を受けた。また校友会雑誌に投稿。中学図書館の蔵書を読みつくし、県立図書館に通った。中学四年のとき文芸部委員になり、ストライキに参加、首謀者の一人と目され停学処分を受けたが、成績優秀なため退学だけは免れた。しかし貧乏はますますひどく、受持教師の世話で、銀行家小野家の住込み家庭教師となった。のちに彼の意中の人になった林房子は小野家の義妹である。

大正八年（一九一九）十六歳のとき熊本第五高等学校に抜群の成績で入学した。これは小野氏の援助によるもので、法学部入学を条件として毎月十二円を借用した。母、伯母加代からも若干の送金を受けた。わが子の教育のために生活に苦闘する母ヒデのおもかげは、彼の初期の名作「蘭」のなかにうかがうことができる。

彼ははじめて家と郷里を離れた寮生活のなかに、自己と解放感を味わい、上級生たちから酒の洗礼を受け、熊本風の高校生活を楽しんだ。クラスの文学的無頼漢たちの仲間に入り「ドン・ファンの子」という回覧雑誌を作ったりして、相変らず文学に耽溺していたが、自らアナーキストと称する上級生藤井某に教えられて、当時の秘密出版物だったクロボトキン、バクーニン、幸徳秋水、マルクスなどの



小学校3年

著書に初めて接するようになった。

つづいて山川均「社会主義研究」、河上肇「社会問題研究」、雑誌「種時く人」、室伏高信の著書などを熟読、藤井のアナーキズムにあきたらぬようになり、同級生数名と語らって、共產主義を自称する秘密結社「R・F会」(Die Rote Fahne 赤旗の略)を作り、白川河畔に合宿した。「文学も芸術もあきらめた気になり、文学書、楽器、絵具箱を売りはらい、酒をやめ、長髪を切り、すでに小野夫人となった林房子の恋文の束を白川端の夕闇に焼き捨てた」と「年譜」に誌されている。十八歳のときである。

それより前、東京帝大に、吉野作造博士のデモクラシー理論を支持する学生たちによって「新人会」という結社が作られていたが、大正十年の暮に会員の黒田寿男、志賀義雄、伊藤好道たちが宣伝隊として九州遊説にやってきた。彼らの目的は、五高と七高（鹿児島）に芽生えていた学生社会主義団体を煽動し、それを一高、二高、三高、四高、八高と結びつけてH・S・L（高等学校連盟）という半秘密組織を作ることにあった。

彼はこの遊説隊から深刻な影響を受け、彼らが帰ってから、仲間とはかって校内で宣伝演説会を開いたとき、幼少のころから悩まされていたひどい吃音^{どもり}を全く忘れて「憑かれた人」のように一時間に近い大雄弁を振るうことができたほどであった。これは彼自身もおどろく奇蹟であった。だが奇蹟であったから二度とは繰り返されなかった。（三）

日目あたりから、私はまたもとのドモリにかえったが、「神聖な狂気」の方は残った。私の狂気は次第に学内に伝染し、五高の「社会問題研究会」は全国高校の中でも最大のグループになった」と彼は「文学的回想」(昭和三〇・新潮社)のなかで書いている。

彼は引きつづいて新人会の指令に従って「ロシア飢饉救済運動」を組織して各学校に細胞をつくった。熊本高女のなかにもそれができた。印刷労働組合のなかに徳永直を発見し、そのマルクス主義的教育をはじめたのもこのころである。またリーブクネヒトとローザ・ルクセンブルグの虐殺抗議運動を行ない、初めて警察に連行された。起訴保留になったが、熊本の注意人物になった。

翌大正十一年一月、学生運動の中核としての秘密結社「H・S・L」の組織に参加した彼は、その第一回全国大会のために上京。ボルシェビキの戦術を教えられ、また志賀義雄の案内で猪俣津南雄、山川均、徳田球一、市川正一、西雅雄らに紹介された。これらの人たちによってすでに第一次日本共産党が極秘裡に組織されていたが、むしろ彼はそれについて何ら知るところがなかった。

一方、五高では彼はのちの方葉学者森本忠とともに文芸部委員となり、校友会雑誌「龍南」に社会主義小説「村」や評論「プロレタリア独裁について」を発表した。一級下に上林暁がいた。

翌大正十二年(一九二三)は関東大震災の年である。こ

の年五高を卒業した彼は東京帝大法学部政治科に入学した。というよりも彼自身

身の言葉を借りれば「新人会」に入学したのであった。彼はただちに熱心な活動分子となり、まず自活を志して小野氏の学資援助をこたわ

た。五月一日には友人の背広を借りて初めてメーデーに参加し、神田署に留置された。そのときメーデーの列のなかで、出版労働組合の旗を持った徳永直とめぐり合った。早稲田大学の軍事教育反対運動を応援に行き、帝大生の角帽をポケットにかくして、壇上の將軍たちを弥次り倒した。小樽高商の軍教反対運動にもオルグとして派遣された。この旅行中の見聞が、のちに「林檎」の材料となるのである。

夏の休暇には大分に帰省。学生を組織し、レコード・コンサートで得た資金によって、農村青年啓蒙のための小型



熊本第五高等学校時代 寮にて

新聞「黎明」を作成、青年団に配ったがほとんど反響なく、彼は同志たちに申し訳がないと独りで苛立ち、煩悶しているうちに、夏休みは終わってしまった。そのとき突如として起こったのが九月一日の関東大震災であった。当時の地方紙は今日から見れば信じられないような荒唐無稽な報道に満ちていたが、東京で革命的暴動が起こり、皇太子殿下が行方不明になられたという報道を真実と信じこんだ彼は、自分だけが一人取り残されて、革命の落伍者となり、階級的裏切者となってしまったと思い、あてもなく山の中を歩きまわり、海岸に出て、そのころはまだ飲めなかった酒を飲み、死ぬつもりで夜の海にボートを漕ぎ出したりした。

しかしまもなく新人会から、上京を見合わせて、九州で活動せよという指令を受け、それに応じて「教育復興学生連盟」を作り、映画「ロビン・フッド」を持って各地をまわった。このときの収益は後に末広厳太郎博士の「帝大セツルメント」設立の資金になった。

十一月に上京した彼はバラックの寄宿舎に住み、自活のために食堂委員となり、また新人会のフラクとして「大学新聞」の記者になった。それからの数年間彼は文学とは全然関係のない生活を送った。すなわち「大学新聞」の記事を書くかたわら「学生社会科学学生会」の重要な機文やアジビラをさかんに書かされた。またこの種の文章を書くときにはなんびとの追隨をも許さない独特の才能を彼は示し

た。それは後年の彼の鋭い匿名批評とつながるものである。今でも、人の書いた学生運動史や社会運動回顧録などを見てみると、《おや、これはおれの書いたものらしい》とドキリとする《名文》が引用されているのに時々出くわす」と彼は「文学的回想」のなかで書いている。

大正十三年（一九二四）二十一歳のとき父滝太郎が死んだ。彼は母を東京に迎えて新人会合宿の世話役になってもらった。彼女は共產主義団体とは知らなくて、真面目で貧乏な学生たちの合宿と思いこみ、懸命になって彼らの世話をして、会員たちに慕われた。中野重治の「むらぎも」には彼女とおぼしい「おばさん」が次のように描かれている。《彼女には愚痴っぽい影がない。不仕合わせを見せつけたがるある種の人々の卑しさが無い。どうかしたはずみに、彼女が彼女一人の物思いにおちこむらしいことには安吉も気づいていた。しかし彼女は、安吉などにはわからないやり方でそれを忘れてしまうのらしかった。それは智慧のよいなものであるらしかった。彼女の歌うのは見たことがなかったが、しかし頬に赤味のさした、五十と六十とのあいだくらい、いくらか肥り気味の彼女のからだそのものが歌っているように見えることがあった。これは息子が日本最初の治安維持法にかかって、京都の未決監につながっていたころの彼女の姿である。

さて筆を元に返すと、彼は生活の資にあてるために、佐野学の代訳で「レーニン全集」その他の翻訳を手伝った

り、大正十四年には志賀義雄のすすめで「マルクス主義」(當時の非公認共産党の理論機関誌)の編集員となつて十五円の月給を貰つたりした。

彼が林房雄というペンネームを始めて使用したのは、この「マルクス主義」に論文を発表したときである。このペンネームが彼のかつての愛人林房子をもじつたものであることはあらためて云うまでもあるまい。それらの論文「日和見主義の誕生」や「中間階級の没落」は明快で派手なものであつたから、読みにくい学者の文章にくたびれていた同誌の一部の読者に好評を博し、彼は内心大いに得意になつて、党理論家の一員に加わりえたような氣になつていった。同じころ、雑誌「新人」に求められて学生運動についての評論を書き、稿料十円をえ、その多額におどろいた。これが最初の稿料であつた。

またそのころ女子大学生某女と恋愛したが、彼女の心が志賀義雄に移つたので、傷心のあまり、志賀と相談して仕事の分野を変えてもらうことになつた。そして志賀から与えられた仕事は、それまで東大法学部中心であつた新人会の勢力を、文学部に拡大するために、「社会文芸研究会」を作ることであつた。しかしこの会の目的は文学の研究ではなく学生を新人会に引きずりこむ手段にすぎなかつたが、文学を忘れることができず、上野桜木町の新人会合宿の一室で、アンデルセンの「月の物語」の童話形式を借り、そのなかにマルクス主義イデオロギーを盛りこんだ思想的散

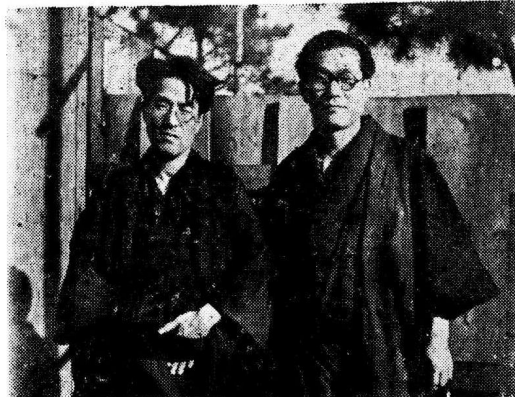
文詩「絵のない絵本」をコツコツと書きためていた彼は、作家になりたいという希望をいよいよつのらせていたので、再び文学に帰ることができるという悦びに胸をふくらませて、この文芸研究会組織の仕事に熱心に取り組んだ。中野重治、谷一(太田慶太郎)、鹿地亘、佐野碩、久板栄二郎、川口浩、のちに亀井勝一郎や窪川鶴次郎、西沢隆二(ひろし・ぬやま)、などがこれに加わつた。

またこの年(大正十四年)の六月に「文芸戦線」の復刊号が出たが、彼はそれを読んで、いろいろな意味で興奮した。そして、当時「文藝春秋」の巻頭を飾っていた芥川龍之介の「侏儒の言葉」の向うをはるつもりで「種々の言葉」という氣取つた短評を書いて投書した。それが第二号に載り、それ以後ほとんど毎号採用されて、彼はいつのまにか「文芸戦線」の寄稿家のような格好になつた。このことも文筆で立ちたいという彼の野心をおおつたにちがいない。

一方、「社会文芸研究会」については、彼はこれを新人会の単なる會員獲得機関ではなく、独立したマルクス主義文学の研究会にしようと考えた。それは當時のプロレタリア文学運動は熱情はあつても、理論と教養の背景がなく、徒らに荒つぱいばかりであるから、「文藝春秋」派に代表されるブルジョア文学には到底対抗できない。プロレタリア文学の勝利の早道は帝大生や学生連合会の會員のなかから優れた作家や評論家を養成することにあると考えたからである。この考えは、一部の新人會員から「文化主義的偏

向」という批判を受けたが、反対を押し切って「社会文芸研究会」を「マルクス主義芸術研究会」と改称、学外から山田清三郎、佐々木孝丸、千田是也、柳瀬正夢、葉山嘉樹などを加え、新人会から独立した形になって、活潑なプロレタリア文学運動を展開した。

彼が最初に世に問うた小説は、大正十五年一月、佐野碩の熱海の別荘で書いた「林檎」で、これは「文芸戦線」二月号に発表されて好評を博した。三月、軽度の肋膜炎となり、伊豆湯ヶ島湯本館に行き、新入会員で歴史家の服部之



昭和18年ごろ、島木健作と

聡に会い、同館滞在中の新進作家川端康成に紹介された。川端は東大生後藤寿夫が文戦派の作家林房雄であることをすでに知っていた。

主として共産主義活動の抑圧策として、国体の変革と

私有財産の否定を目的とするすべての行動に対する罰則を定めた治安維持法が公布されたのは大正十四年であるが、その最初の犠牲になったのが、京大を中心とする関西学生連合会の学生たちであった。そのとき東京からも帝大、早稲田、慶応の学生が五名ほど同時に起訴されて、学生服のまま三月の末に京都未決監に収容されたが、そのなかに林房雄も加わっていた。彼は前年十二月に志賀義雄の後を受けて「学生連合会」の秘密委員長になっていたからである。未決生活は五カ月つづいたが、入獄中に「文芸戦線」の同人に推薦され、佳作「繭」が雑誌「解放」に、処女作「絵のない絵本」が「新小説」（五月号）に発表された。彼はまた未決生活のあいだに大学三年の不勉強を取りかえすために猛烈に勉強したが、読んだものは共産主義関係の文献（そのころはその種の書物の差入れを裁判所で許可したのである）が大部分であったから、九月初旬に保釈出獄した時には、以前よりもさらに確信的な（または狂信的な）共産主義青年になっていた。

ところで出獄してみると、「新潮」から新人特集号のための小説の注文が「マルクス主義芸術研究会」気附で来ていた。このときプロレタリア文学関係では彼一人だけが指名されていた。このことは平野謙もいうように、《林房雄の才能だけがいわゆるブルジョア文壇にも登録された》ことを示すものであろう。彼は中野重治と久板栄二郎に励まされて、獄中で腹案した「N監獄署懲罰日誌」を三日間で



母とデビ

書き上げて投稿した。好評であった。このとき「新潮」に作品を発表した新人十人のなかで、現在も文壇に活躍している小説家は林のほか、舟橋聖一、藤沢桓夫の二人である。

翌昭和二年（一九二七）

彼は佐野学編集「無産者新聞」の記者となり、主として文化欄を担当した。二月には川端康成のすすめで、ブルジョア文学陣営にぞくする「文芸時代」に「牢獄の五月祭」を書き、また「文芸戦線」の社説として「社会主義芸術運動のテーゼ」を発表した。このテーゼは、山田清三郎の「プロレタリア文学史」下巻によれば、《その作製までには、同人のあいだに討論がおこなわれ、だいたいこの線はでいた。だから、筆責は林だけに負わせるべきものではなかった》が、彼自身の言葉を借りれば、《これが当時労農派（山

川均、青野季吉派）の排除に着手していた福本派の攻撃目標となり、是枝恭二（日共党员）の指令を受けて、鹿地亘が「文戦テーゼ批判」を「無産者新聞」に発表。この事情を知らぬ林は文戦テーゼの正しさを主張し、鹿地、是枝、谷らと論争して譲らず、これよりプロレタリア文学運動の分裂と再分裂が始まった》のであった。

このテーゼは社会主義文学は何よりもまず芸術でなければならぬ。社会主義文学と芸術価値とは両立する。社会主義文学は芸術的価値を追求する。そうすることによってのみ、階級戦線において強力なる役割を演じ得ることを主張したものであって、今日より見れば文学論のイロハであるが、平林たい子のいうごとく《その当時としては、勇気を要する断定だった》。果して、プロレタリア文学を階級闘争のための進軍ラッパたらしめようとする小児病的論者たちの烈しい攻撃を受けた。一方林は、京都における裁判中に執筆した「酒盃」を「改造」三月号に発表したのを手始めに、ブルジョア新聞や雑誌に盛んに原稿を書き始め、それがまた左派の人たちを刺激して、右翼偏向として攻撃の目標にされたのであった。

その結果、彼はこの年六月に「日本プロレタリア芸術連盟」を脱退、「労農芸術家連盟」を青野季吉、蔵原惟人、山田清三郎、前田河広一郎、葉山嘉樹、平林たい子らと結成、「文芸戦線」を機関誌として続刊したが、十一月には「労農芸術家連盟」にまた内部分裂が起こり、林は蔵原、

山田らと連盟を脱退して「前衛芸術家同盟」を結成、機関誌「前衛」を創刊した。

山田清三郎は前述の「プロレタリア文学史」下巻のなかで関東大震災（一九二四）から昭和二年（一九二七）に至る時期をプロレタリア文学運動の第二の闘争期と規定して、次のように書いている。

「プロレタリア文学の第二の闘争期は、葉山嘉樹、林房雄の時代ともみられた。というのは、二人は相前後してあらわれ、ともに双翼のごとく注目をあび、そしてプロレタリア文学の再進出のためにあざやかな役割をしめたからである。嘉樹が、その労働と、労働運動の体験にうらづけられた作品で、プロレタリア文学の新しい時代をきりひらいていったのにたいして、房雄はむしろ、ジャーナリスチックな評論と、器用な小さな作品に、本能的とさえいえるほどの鋭敏な時代感覚を盛った才気にひらめく活動で、葉山と対比的な存在だった。」

平野謙もその「昭和文学史」のなかで書いている。「林房雄は東大の新人会出身の典型的な『学生ソシアリスト』のひとりと目されていたが、当時大宅壮一が『君はニセ坊ちゃんだね』と批評したように、平凡な大学生とはちがって、母ひとり子ひとりのかなり困難な経歴をへてきたようだ。……しかし、苦学生じみた暗い影は、ほとんど林房雄には見あたらなかった。彼の煥発の才気がそれらを覆いかくしていたのである。初期の『文芸戦線』に『種々の言

葉」というような芥川龍之介をもじったパロディめいたハイカラなエッセエを発表したり、新感覚派のブチブルジョア性を巧みにからかったり、ボグダーノフやルナチャルスキイの理論を最初にもちこんだりして、従来の自然主義ふうのかなり鈍重なプロレタリア文学に一種清新な窓をひらいた功績は、そういう林房雄のなみなみならぬ才気にもとづくものである。」

この前後から昭和五年（一九三〇）四月、共産党シンバ事件で再検挙されて、七月に刑期二年で下獄するまでの期間は、彼が新進作家として売り出した最も華やかな時代で、プロレタリア文学運動にもジャーナリズムにも目ざましい活躍をした時期である。若い女性にも取り巻かれていた。《とはいえ、林は現在の彼では想像もつかない清潔な青年だった。青野季吉氏が酒を呑むことにまで干渉した。若い女性が集まったのは、彼のそういう一面の魅力があずかっていた。しかし、彼は颯爽と『文芸戦線』で、福本派と論争している間に、ひょっこり川端康成氏らの『手帖』の同人になった。文戦仲間の葉山や里村がそれを憤って、結局それが一つの溝になった。林はやがて、間借りから家を持って、お母さんと伯母さんとを引き取った。お母さんは一人息子の彼を勉強させるために製糸工場に行ったり、学生寮の飯炊きになったりした、聡明な温かいおばさんだった。仲間の取沙汰では、いつも林への逆説からお母さんの存在は彼以上に高く評価され、尊敬されていた。彼の高

円寺の住居はささやかなインテリ向きの平家作りである。が、間もなく、そこから近くのとてつもない大きな家に移った。……しかし家賃を払うわけではなく、誰かに頼まれて留守番をする形式で得た家だった。ずっと後にも彼は、小泉三申の知遇を得て、彼の伊東の別荘に長く住むことになるのだが、林はこうして、誰かの知遇を得るふしぎな人徳と手腕とをもった人間であることがこのとき最初に証明されたのである」と、当時林の近くに住んでいた平林たい子が、戦後、「自伝的交友録」のなかで書いている。

また林の「文学的回想」によれば、彼はこのころ、外務省官吏夫人で日本の婦人プロレタリア作家の草分けだった若杉鳥子や新劇女優の花形だった花柳はるみと情人関係にあり、花柳とは結婚まで考えたという。

一方、左翼文芸運動においては彼は絶えず「仮借なき批判」と「理論闘争」の目標にされていた。その間の事情については、その方面の知識の絶無である私には判断の余地はないが、彼がのちにプロレタリア作家廃業を宣言し、転向に踏み切ったのは、左翼陣営内の党派争いの醜悪さと愚劣さをいやというほど見せつけられたことにもよるが、彼が生まれついてマルクス主義者たる資格に欠け、党の鉄のごとき統制に束縛されることを本能的に拒否する不羈奔放な性格の持主であることによることはまちがいない。彼自身も書いている。《私の性格は絶対に共産党向きではない。彼らは「小市民的インテリ性」とか何とか適当な形容詞を

くつつけるであろうが、何はともあれ、私は秘密運動のできる男ではない。秘密運動でなくとも、政治的な謀略や欺瞞には堪えられぬ性質に生まれついている。派手と贅沢が好きで、現世的な慾が多すぎるし、今はいくらかおとなしくなったが、特にそのころは主角だらけの我儘者であった。干渉や統制の大嫌いな独立自尊派で、氣にくね奴とは相手がまわらずに喧嘩する。頭は共産主義者かもしれぬが、行動は百パーセントのアナキストであったから、共産党幹部が警戒し、敬遠したのも無理はない。私の「転向」の原因の一つは、持って生まれたこの性格だと思ふが、自らそれに気がついたのは、ずっと後のことである。二十四歳の私は、黨員でもないのに、共産主義者をもって自任し、氣負い立ってプロレタリア文学運動に突入して行った。》

III

さて彼は昭和五年七月に入獄することになるのであるが、その前に大堀繁子と結婚した。《彼のところには相変らず若い女性の出入りが多かった。……そのころ、中野西町の私の家に、一人の文学少女が訪ねてきた。どこかの事務員らしく、身なりは見すばらしかったが、背丈が高く、チャーミングな目つきをしていた。話をしてみると、これという才能の閃きはないけれども、ちょっと氣取って取り澄ましている娘だった。一二度応対しただけで、来なくなったが、間もなく私の家の筋向いに空いていた小さい家を

借りて、友達と二人で移ってきた。友達には、彼女ほど、背も高くなく、顔つきが苦み走って、美人ではなかった。このチャーミングな方の女性が、のちの林夫人繁子さんである」と平林たい子は書いている。

彼の刑期は二年で、市ヶ谷刑務所より千葉刑務所へ、さらに豊多摩刑務所に移された。彼の獄中生活は、家族に宛てて書いた三十五通の手紙につぶさに語られている。これは「獄中記」として「婦人公論」に発表、その原稿料は留守家族の生活費に当てられたというが、彼の数多くの著作のなかでも最も読者の胸を打つものの一つである。じめじめしたところは微塵もなく、若さからくる気負いは免れないとしても、常に胸を張って昂然としている。むしろ獄中生活を楽しんでいるかのような印象を与えられる。母、伯母、妻に対する深い愛情と、こまやかな心遣いを率直に吐露し、出獄後の計画や夢について語り、また貪婪な読書欲を示している。彼が獄中で読破した書物は百冊を越えるが、とくに「ハイン全集」を原文で勉強し、また明治維新史と伝記類を読みあさった。この知識が傑作「青年」に結実するのである。

昭和七年（一九三二）の四月末に出獄した彼は、谷中の墓地が二階の窓から見晴らせる初音町の寓居に身を休ませた。《墓石の列を眺めながら、私はゆっくり歩こうと考えた。あわててゐることはない。いくらあわてても、行きつく先は墓場なのだ。この家に住む家族は、五十二歳の母と六十四歳

の伯母と二十六歳の妻と、それから二十九歳になった私と他に猫一匹。私は二階のベッドに寝たり起きたりしながら、獄中で構想して来た長篇小説「青年」を書いた。疲れれば眠り、身体の調子とお天気のいい日には、妻と母を誘って墓地を歩いた。賑やかな町にはほとんど全然出なかった。母も妻も伯母も、口をそろえて、出獄以来、私がいへん家庭的になり、優しくなったと言った」と彼は書いている。「青年」は「中央公論」八月号から十二月号まで連載されるのであるが、それより前に出獄^{きさく}匆々の五月に「東京朝日新聞」に発表した「作家のために」や、「改造」七月号の「文学のために」、「新潮」九月号の「作家として」などの一連の感想は左翼文壇に少なからぬ衝撃を与えた。平野謙の解説を借用すればこれらのエッセイのなかで林は、作家



大分中学校時代

の資格と権利とを主張したのである。《作家の資格は学者や政治家や新聞記者が見ようとしても見ることでできない現実の深奥に光のように侵入してゆく能力のことをいうのだ、レーニンやスターリンの理論の絵解きではなく、逆にレーニンやスターリンをして感心せしめるような小説を書いてこそ作家といえる、日本歴史の夜明け前を「叢くさむらのなか」から描きだすことはプロレタリア作家に課された重大な任務なのだが、それを藤村が着手したのは、客観的には藤村がプロレタリア作家の任務をはたしつつあることだ、政治と文学の間をながく迷ってきたが、今は文学のために一生をかけることに心を決めた、日本のルネッサンスはプロレタリア・ルネッサンスであり、文学のルネッサンスはプロレタリア文学に課されてある」というような熱烈な作家の覚悟を、林房雄は声高く叫んだのである。

これは文学のイロハであり、常識であるが、すでに地下にもぐっていた小林多喜二らによって「右翼的偏向」と呼ばれ、「階級性抹殺の理論」として烈しい非難と攻撃を受けた。《彼が腹を立てるのはたしかに無理もなかった。小林は最後まで私を「同志林」と呼んだが、彼と私とはこの時すでに全然逆の道を歩いていたのだ。小林多喜二にとっては、「共産党の兵卒または奴隷」に自己を鍛え上げることが、人間の成長及び成熟の唯一の道であったから、私の「人間の成長」は理解できなかったのだ」と林は書いている。

林は右のエッセイに述べられたような抱負を実現するために「青年」の創作にかかった。「青年」は林の代表作の一つと考えられている傑作であるが、左翼陣営からは無理解と悪評をもって報いられるだけであった。しかし《私は彼らの攻撃には屈服しなかった。私はまだ自分をプロレタリア作家であり、マルクス主義者であると思っていた。唯物史観と唯物弁証法について、小林多喜二や徳永直の教えを受ける必要はなく、明治維新に関しては専門の左翼歴史家の誰にもおとらぬ知識と正しい解釈を持っていると自信していた》《私は彼らの「批判」にも「先見」にも断じて屈服せず、猛然と『青年』を書きつづけた。私は自分が獄中で学んで来たものと、彼らが外で学んだものとの間の埋めることのできない距離をはつきりと見た。彼らの無学と無知から生まれた粗雑な政治主義をはつきりと軽蔑した。東京から鎌倉に居を移したのも、病気のせいだけではなかったようだ。私は彼らの「階級的闘士顔」に我慢ができなくなったのだ」と彼は書いている。

年譜によれば、昭和七年の暮に《下獄疲れと仕事疲れとのために発熱し、鎌倉名越上森子鉄家で静養。以後鎌倉に居住》とあるが、この鎌倉に移ったことが、小林秀雄を知り、次いで小林や旧知の川端康成、武田麟太郎とはかつて雑誌「文学界」を翌昭和八年十月に創刊する機縁になるのである。彼は三十歳になって始めて安住の地と、振幅の大きい彼を真に理解してくれる信頼すべき友人を得たのであ